

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 出版業界の現状

#### - 田園将蕪

出版翻訳の関係者、出版の関係者はみな、もともと本が大好きなはずである。本は心の故郷だ。その故郷がいま、将〔まさ〕に蕪〔あ〕れようとしている。稼ぐが勝ちというかもしれないが、本の市場が蕪れはてれば、稼ぐことなどできなくなる。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 田園将蕪

最近、ふとしたきっかけで、古い記憶がいくつか蘇った。ひとつはもう二昔以上も前のことだ。日本人はすごいという話を、東南アジアの若者から聞いた記憶である。石油関係のプラントで働いていたとき、ある日本人の活躍を見て、日本人に対する見方が一変したというのだ。

何しろ 20 年以上も前に聞いた話だから、真偽を確かめる術もない。技術的にありうる話なのかどうかも分からない。だから、これは一種のフォークロアとして読んでいただければと考えている。だが若者は、自分の目でその様子を見た話していたし、戦争の思い出がまだ強く残っていた時期に、日本人に対する見方が一変したというのもおそらく、事実なのだろう。

話の大筋はこうだ。ある日、プラントにサイレンが鳴り響き、全員退去の命令が出された。フレアの火が消えたというのだ。フレアというのは、30 メートルほどの鉄塔の上にある装置で、プラントの排ガスを燃やす仕組みになっている。火が消えると、ガスが地上に下りてくる。これに火がつけば、プラントが爆発する。何基もある大きなタンクに火がまわれば、大爆発になって、何千人かが犠牲になりかねない。だから全員退去、一刻も早く近くの丘の向こうに逃げろというのだ。

車で逃げる人、乗り遅れて走って逃げる人で混乱するなか、逆にフレアに向かっていった男がいた。プラント増設工事を請け負っている日本企業の職人だ（だぶだぶのズボンをはいて、安全靴ではなく、変わった靴をはいていたというから、鳶職なのだろう）。フレアの周囲は危険なので、サッカー場ほどの広さの空き地になっていて、フェンスで囲われている。フェンスを乗り越え、鉄塔の下まで行き、立ち止まった。ヘルメットを脱ぎ、タオルを頭に巻いて、鉄塔を上りはじめた。ガスが噴出している装置のところまで行き、修理し、火をつけ、鉄塔を下り、ヘルメットをかぶり、何事もなかったように現場に戻って仕事を続けたという。

建設業界には少しは知り合いもいるので、あり

うることだと思う。義理と人情の古い世界、といえはたしかにそういう面があるだろうが、古い人間の良さを受け継いでいる。義を見てせざるは勇なきなりという言葉があるが、いざというときに損得を考えず、この話のように、命まで懸けて行動する。そういう心意気を示す逸話はたくさんある。東南アジアの若者を感激させた鳶の話もそうだが、事故や災害のときなどに真先に駆けつけるのはたいてい建設業界の人間だ。

大がかりな例をあげれば、阪神大震災のとき、建設業界が一斉に救援に駆けつけている。倒壊したビルで人命の救助にあたり、傾いたビルを解体して、危険を取り除いていった。鮮やかな仕事ぶりだったという。

ところが、建設業界はその勇氣と心意気を称賛されたというわけでもなかった。もちろん、感謝した人が多かっただろうが、かなりの陰口をたたかれてもいる。手抜き工事がばれないように、あっという間に証拠を隠滅してしまったというのだ。なぜそんな陰口をたたかれたのか。たぶん、小さな手抜き、大きな不祥事がたくさんあって、業界全体が不信感をもたれていたからだろう。不信感をもたれるようになっていけば、どんな行動をとっても、すべて裏目にでることになりかねない。阪神大震災のときの建設業界がその好例なのだろう。

こんなことを思い出したのはもちろん、耐震強度偽装問題があったからだ。建設業界への不信感がこれでまた強まり、たぶん 10 年以上の年数が経過しなければ、業界が何をやってもいっても裏目にでる冬の時代が続くだろう。建設業界にとって気の毒な状況になっている。

だいたい、マンションの構造計算書なんて、誰も重視していなかったという意見もある。書類が整っていれば、中身を見ることもなかったというのだ。たぶんそうなのだろう。だから、少しばかり手を抜いても文句をいう人はいない。建設コストが低くなるから、施主に喜ばれ、買い手にも喜ばれ、仕事が増えて収入が増える。収入が増え

ば何だってできる。外車を買って、ぱりっとしたスーツを買えば、人間だって偽装できるのだ。損得を考えたら、続けられない手はない。稼ぐが勝ち、ばれさえしなければ.....。

だが、ばれるのだ。構造計算書など誰も理解できなくても、財務諸表など誰も精査しなくても、本人の言動だけから、世間は何かあると感じとる。目先の損得を優先し、世間が要求する職業倫理を軽視したとき、どこかでかならずしっぺ返しを受ける。だから、天網恢恢という言葉がある。

だから、世間の期待を裏切ってはいけない。世間の期待をはるかに超える仕事をしなければいけない。そうしなければ、翻訳のように何の資格も特権もない仕事で食べてはいけなないと、我が身に引きつけて考える。翻訳という業界、そして出版という業界は、建設業界の不祥事を他人事としてみていられるのだろうか。

たとえば、出版翻訳には下訳という仕組みがある。翻訳書には訳者名が書いてあるが、著名人が訳者になっていたら、疑ってかかった方がいい。もちろん本人が訳している場合もあるが、たいていは下訳者が訳したものだからだ。実際には訳していない著名人を訳者に仕立て上げるのは、もちろん、著名人の名前を売ろうと考えるからだ。一種の偽装である。

それがどうしたという意見もあるだろう。たとえば、耐震強度計算を実際には事務員がやっていて、一級建築士がチェックをただけであっても、耐震強度が十分にあるのであれば、とくに問題はないのではないだろうかという意見だ。だが、著名人の名前を掲げて、別人の訳文を読ませるのは、羊頭狗肉の誹りは免れない。また、少し考えてみれば分かることだが、質の高い仕事ができる翻訳者なら、こういう形の下訳を引き受けるはずがない。下訳を引き受けるのは、翻訳者として力不足の人だけだ。だから、力不足の下訳者の訳文を、頭にきたとか何とかいいながら、編集者が必死になって直してないがぎり、悲惨な翻訳のまま出版されるのが普通だ。

著名人が訳者ということになっているが、実際には力不足の下訳者が訳したという本は、以前よりかなり減っているように思える。読者もそう何度も騙されるほどお人好しではないので、著名人

の名前で翻訳書を売ろうという考えが通用しにくくなってきたからなのだろう。

いまでもかなり目立つのは、翻訳家の名前かそのペンネームを訳者名として掲げているが、実際には下訳者が訳している場合である。ベストセラーになった翻訳書を読んでいて、翻訳の質があまりに低いので驚いたことがあった。若手ではあるが、実力があるとされている翻訳家が訳したものだからだ。やがて疑問が解けた。ある翻訳学校で、その翻訳家のクラスに受講生が殺到しているという話を聞いたからだ。殺到しているわけは.....、じつに簡単だ。そのクラスの受講生があつたベストセラーの下訳にあたつたと、翻訳学校が宣伝したのだ。

もちろん、下訳者と元訳者の関係はさまざまであり、それによって翻訳の質に違いがでてくる。極端な場合、元訳者は何人かの下訳者に仕事を割り振るだけで、できあがった訳文を読みもしないことがある。元訳者というのは名ばかりで、実際には手配師にすぎないわけだ。これでは質の高い翻訳になるはずがない。また、下訳を読み、修正をくわえている場合もある。修正の程度はさまざまだが、下訳に手を入れるという形では、ほんとうに質の高い翻訳はできないと思う。だが、下訳者がいるから、元訳者がひとりで訳した場合より質が高くなると思える場合もある。それは、下訳者というのがじつは名前のうえだけで、実際には元訳者とほぼ対等の立場に立つ共訳者である場合だ。名目上の元訳者と名目上の下訳者がたとえば半分ずつを訳し、二人で遠慮なく、徹底的に議論して訳文を磨いていけば、翻訳の質が向上する可能性がある。このように、下訳者と元訳者の関係はさまざまだが、訳者偽装だといえるものが多いのが現実だろう。

もっと目立つのは、大学教授など、その分野の専門家らしき肩書の訳者や、翻訳家という肩書の訳者が実際に翻訳しているようなのだが、いかにも力不足だという例だろう。後に触れるように、いまでは出版点数が以前とは比較にならないほど増えているので、翻訳担当の編集者は翻訳者を探すのに苦労している。力不足でも、目をつぶって発注し、目をつぶって出版しなければならぬことが少なくない。鉄筋が不足していることは重々承知しているのだが、それでも工事を進めなければならぬような状況に陥っているのだ。鉄筋が

少なくても耐震強度が不足していても、運悪く地震が起って倒壊でもしないかぎり、誰にも分かりはしないといった人がいるそうだ。翻訳の場合には、訳者の力不足は読者にすぐに分かる。厄介なことに、読者にすぐに分かるのに、訳した本人にだけは分からない場合が多い。このままなら偽装ではなく欠陥だ。しかし、担当編集者が欠陥に目をつぶるわけにはいかないと判断して訳文を書き直していれば、訳文に最終責任を負っているのは「訳者」ではなく、編集者になる。その場合は訳者を偽装している。

翻訳出版から日本人著者による出版に目を移すと、ここにも偽装の例がいくつもある。たとえば、話題のベストセラーのひとつについて、「著者」が新聞のインタビューに答えて、自分が話した内容を編集者がうまくまとめてくれたと語っている。「著者」は何時間か話ただけで、実際に書いたのは編集者だというのである。じつのところ、「著者」が実際には書いていない本はそれだけではない。小説の場合にはさすがにそういう例はめったにないだろうが、小説以外の分野では、気軽に読めて評判のベストセラーが実際には、編集者やフリーのライターが書いたものだという例がたくさんある。100点を超えるほどの「著書」がある有名な「著者」について、本人が書いたのはごく初期の1点か2点だけだという話を聞いたこともある。気楽に読んですぐに捨てる本なのだから、めくじらを立てるほどではないかもしれないが、一種の偽装であるのは確かだ。それに、書店に行っても著者偽装本ばかりが目立つところに並んでいるのだから、少しも楽しくない。書店にいくとは思わなくなる。

有名人が何時間か話した内容に基づいて本を作ること自体が悪いというのではない。有名人の「著書」ではないことが明確になっていけば、読者を裏切ることにはならない。そのための方法がいくつかある。たとえば、「述」「口述」「談」「原案」とする方法がある。そして実際に執筆した人を、「著者」として表示すればいい。

別の例をあげれば、著者の原稿の質が低く、編集者が著者の了解を得て、文章に徹底して手を入れた場合、編集者の名前を少なくとも共著者として表示すべきだ。そう表示すれば、偽装にならない。「監修者」、「監訳者」などの表示にも同じことがいえる。実質を伴わないのであれば、この

ような表示を使うべきではない。読者の信頼や期待を裏切ってはいけない。

下訳を使った翻訳書、実際には編集者かライターが書いた本がベストセラーになっているのではないかという意見もあるだろう。100万部を超える大ベストセラーになった本もある。編集者にとって、100万部の大ベストセラーがいかにもありがたいかはよく理解できる。赤字が吹き飛ぶ。給料が遅配になっているという噂ですが大丈夫ですか、などと聞かれることもなくなる。人員整理や身売りの噂も消える。交際費だって使えるようになる。雑誌部門が儲かっていて、そんな心配はなかった出版社でも、社内で肩身の狭い思いをしなくてもよくなる。売ればいい、稼ぐが勝ちだ。それに、お客さまは神さまだ。読者が求める本を作るのが当然ではないか……。

そう主張するのなら、はっきりいおう。読者は神さまではない。全知全能の神が本を読むはずがない。人間が書いた物語に感動の涙を流すはずがない。どんでん返しやトリックに驚くはずがない。読みやすく分かりやすい解説書、気軽に読めるエッセーなどに飛びつくはずがない。読者は向こう三軒両隣にちらちらするただの人だ。ただの人だから本を読む。本を読むとき、テレビや映画、新聞やインターネットなどでは得られない何かを求めている。自分の知識や想像力が及ばない何かを求めている。自分を高めてくれる何かを求めている。そうした読者の期待にこたえられない本がベストセラーになったとすると、喜ぶべきではない。悲しむべきだ。100万人がそういう本を買ったとき、本という媒体には魅力がないと感じる人が90万人増えた可能性があるのだから。

文は人なりという。同じテーマを扱い、同じ主張をしていても、人によって文章が違う。だから本は面白い。だから、著作権法という特別の法律で著者の権利を守っている。「著者」や「訳者」の表示が有名無実になり、実際には編集者やライターが文章を書いているか書き直しているかどうか。編集者やライターにももちろん、個性があるから、自分の名前で本をだすのであれば、それぞれの個性を発揮する文章を書く。だが、ゴースト・ライターとして書くときには、個性をなるべく消そうとする。何らかの基準、規範にしたがって書いていくか、書き直していくしかない。

では、どういう基準、規範を使うのか。現状ではおそらく、「読みやすく分かりやすい」と呼ばれる基準、規範を使うはずだ。「著者」や「訳者」が誰であっても、「読みやすく分かりやすい」文体を使う。編集者やライターが悪いのではない。著者や訳者を偽装しているときにはたぶん、これ以外に方法がないのだ。月並みな文体にするしかないのだ。

読みやすく分かりやすい本でなければ売れないという意見もあるだろう。だから、読みやすく分かりやすい本にする。骨がなく、筋もなく、歯ごたえのない本ばかりだ。歯が悪くても大丈夫、顎が弱くても大丈夫、安心して食べられる流動食のような本ばかりだ。これでは読者は鍛えられない。咀嚼力がつかない。読者をしっかりと育てていないのだから、読みやすく分かりやすい本でなければ売れなくなる。英語では、こういう状況を self-fulfilling prophecy という。

流動食のような料理では、食事の楽しさが半分なくなる。だから秋刀魚は目黒に限るというのだ。読みやすく分かりやすい本では、本を読む楽しみが半分なくなる。「著者」や「訳者」が書いていないのだから、著作権の意味もなくなる。出版業界は存立基盤をみずからの手で掘り崩している。これでは本が売れなくなるのも不思議ではない。

本はたしかに売れなくなっている。出版科学研究所の発表によれば、2005年の書籍の推定販売額は前年比2.5%減の9197億円、新刊点数は同2.6%増の7万6528点であった。この数値が何を意味するかは、「翻訳通信」2003年7月号の「統計にみる出版不況」で触れている（データは2002年までなので、古くなっている。また、『出版年鑑』の統計を使ったので、ここで紹介するものとは数値に若干の違いがある）。ここではいくつかの要点を指摘するに止めておこう。

書籍の推定販売額がピークになったのは1996年であり、1兆931億円であった。2005年には9197億円だから、過去9年間に15.9%減少している。それだけではない。1996年には新刊点数が6万3054点だった。2005年には7万6528点だから、過去9年間に21.4%も増えている。過去9年に市場規模が16%弱縮小し、新刊点数が21%強増加しているのだ。新刊1点当たり市場規模は、1996年には1734万円だったが、2005年には1202万円に

なり、なんと30.7%も縮小している（書籍にはもちろん、新刊本以外に既刊本があるので、新刊本だけの市場規模は、実際にはもっと小さい）。

ちなみに、2005年の書籍の推定販売額は15年前の1991年の水準にほぼ等しい。当時、新刊点数は約4万5000点であった。この15年に、書籍の推定販売額は増えていないのに、新刊点数は70%近くも増えている。つまり、新刊点数を15年前の1.7倍に増やしてようやく、15年前と同じ売上を確保しているのである。

要するに本は売れなくなっているのだ。売れないから、点数を増やして売上を維持しようとする。その結果、書店は何匹目かの泥鰌〔どじょう〕を狙う新刊本であふれかえり、ますます売れなくなっている。じつに分かりやすい悪循環に陥っているのだ。その点を考えると、いまでも書籍の販売額が年に9000億円を超えていることの方が驚きだといえるのかもしれない。書店の店頭が荒れているのをみれば、もっと売れなくなっても不思議ではない。

長期的な視点で考えるなら、短期的にはもっと苦しくなった方がいいのかもしれない。追い詰められれば、人は誰しも真剣に考えるようになる。さまざまな媒体があるなかで書籍の強みは何かを考え、文化を扱う出版事業の本来の役割を考え、職業倫理を考えるようになる。読者の期待と信頼を裏切らない出版とはどういうものを真剣に考えるようになる。偽装をして売上を確保していれば、とんでもないしっぺ返しをくらうことを実感するようになる。

出版翻訳の関係者、出版の関係者はみな、もともと本が大好きなはずである。本は心の故郷だ。その故郷がいま、将〔まさ〕に蕪〔あ〕れようとしている。稼ぐが勝ちというかもしれないが、本の市場が蕪れはてれば、稼ぐことなどできなくなる。